

## 前置詞 ‘to’ の多義性—推論の役割

### The Polysemy of ‘to’ and the Role of Pragmatic Inference

府 川 謹 也  
Fukawa Kin-ya

#### 0. はじめに

英語において、前置詞は事物の空間関係を表現する際に不可欠な言語要素であり、その多くは本質的意味として空間的性質を帯びている。この空間的意味をどのように記述するかについて、きわめて単純に分類すれば2つの流れがあり、1つはLeech (1969), Bennet (1975), Miller and Johnson-Laird (1976), Ruhl (1989) らに代表されるように、前置詞の意味は有限個の意義素に分析することができ、複数の用例の背後に潜む中核的な意味をその意義素の束として抽出できると主張する構造主義的立場であり、またもう1つは、Brugman (1981), Johnson (1987), Lakoff (1987), Langacker (1987), Taylor (1990) らに代表される、いわゆるプロトタイプ理論 (prototype theory) に基づき、前置詞のもつ複数の意味全体を1つのカテゴリー (category) と考え、そのカテゴリーを構成する個々の要素、すなわち個々の意味の関係をイメージ・スキーマ (image schema) のネットワーク (network) として捉え、その複数の意味の中でもっとも基本的であり、慣習化 (conventionalisation) の程度も認知的際立ち (cognitive salience) の程度も高いものをプロトタイプの意味と認定し、そのほかの意味との関係をメタファー (metaphor) などの認知能力を用いて明示的に関連づけようとする認知意味論の立場である。しかしながら、Brugman (1981) やLakoff (1987), 田中 (1997) らが既に論じている通り、1つの語には1つの意味があるという仮定に立って意義素を用いて前置詞の中核の意味を記述するというBennet (1975) らの分析には限界があり、複数のイメージ・スキーマを定立し、そのうちのある特定のイメージ・スキーマを中核に据え、それとスキーマ関係 (schematicity) にあるイメージをそこからの拡張として多義性を説明する分析方法が有望視されてきている。だが、toの多義性をそのようなネットワークを構成するイメージ・スキーマを介した意味拡張から成るものと分析する是非の検討は別の機会に譲り、本稿では、toがどうして今ある通りの多義性を持つのかを、toには操作的意味機能があり、toによって結ばれた2つのモノ同士の関係を推論 (inference) を駆使して意味づける働きを持っているからであるというふう

#### 1. toの多義性

toには周知の通り、〈方向〉〈到達〉〈限界〉〈程度〉〈目的〉〈結果〉〈結合〉〈比較〉〈接触〉など、同じ1語なのにどうしてそれほど多岐にわたっているのかと不思議に思うくらい、相互に関連性のあることを疑わせるような意味を持った用法が存在する。市販の辞書によると、toの語義と用例は次の通りで

ある.

(1) 『プログレッシブ英和中辞典』(1998) による *to* の語義<sup>1)</sup>

I [方向]

1 《到着点・行く先》...へ, に, まで

the train *to* London ロンドン行きの列車

the path *to* glory 栄光への道

drive *to* the city 町まで車で行く

go *to* church 礼拝に行く

We sailed *to* Europe. 船でヨーロッパまで行った (▶行き先というよりも一般的方角を示すときは *toward* を用いる: The boat was drifting *toward* the shore. 船は岸のほうへ漂っていた)

The tree fell *to* the ground. 木が地面に倒れた.

2 《方向・方角》...へ, ...の方に [へ]

turn *to* the left 左へ曲がる

live a few miles *to* the south 2, 3マイル南に住んでいる

stand with one's back *to* the fire 背を火に向けて立つ.

3 《好意・敵意・権利などの対象》...への, のために, に対する

a title *to* the property 財産の所有権

pay reverence *to* the sun 太陽を崇拝する

drink *to* a person's health 人の健康を祝して乾杯する

*To* your success! 《乾杯で》ご成功を祝す.

4 《目的・意図》...のための [に]

the key *to* success 成功の秘訣 (ひけつ)

come *to* a person's aid 人を助けに来る

sit down *to* a game of bridge ブリッジをするために席につく.

5 《反応・対応》...について, ...にとって, ...に対して; 《関係》...に対して (...の関係にある)

be blind *to* one's children's faults 自分の子供の欠点に気づかない

be sensitive *to* criticism 批判に対して神経過敏である

I am a stranger *to* London. ロンドンは初めてです.

II [接触]

6 《状態・境遇の変化の結果》...へ, に, まで

be sentenced *to* jail 禁固刑に処せられる

He rose *to* fame. 彼は有名になった

Things went from bad *to* worse. 事態はますます悪化した

The traffic light changed from green *to* red. 信号が青から赤に変わった.

7 《作用・結果・効果》...して, したことには, ...になるように, その結果...

*to* his (great) dismay [surprise] 彼が(ひどく)ろうばいした [驚いた] ことには

much *to* the delight of the children 子供たちがたいそう喜んだことには.

- 8 《到達点・範囲・程度・限度》... (に至る) まで, ...にのぼる, に達するほど

*to* (the best of) one's knowledge 知る限りでは

be chilled *to* the bone 骨の髄まで冷え込む

stay on *to* the last minute 最後までとどまる

See pages 5 *to* 9. 5頁から9頁を参照.

- 9 《付加・付属・付随》...の (of); ...に (加えて), ...に属する

the top *to* this box この箱のふた

add thirty *to* fifty 50に30を加える

Find the answers *to* these problems. 次の問題の答えを求めなさい

She is secretary *to* the manager. 彼女は支配人の秘書をしている

He is father *to* the bride. 彼が花嫁の父親です.

- 10 《執着・固守》...へ [に]

hold *to* one's opinion あくまで自分の意見を捨てない

He is deeply attached *to* his wife. 奥さんを深く愛している.

- 11 《適合・一致・伴奏》...に合って [一致して, 応じて, 合わせて], ...どおりに

be true *to* the original 原作に忠実である

keep time *to* the music 音楽に合わせて拍子をとる

Is this kind of music *to* your taste? この種の音楽はあなたの好みに合いますか.

- 12 《古》《資格》...として (as)

take her *to* wife 彼女を妻にする

have a duke *to* one's uncle 公爵を叔父にもつ.

- 13 [数] (序数を伴って) ...乗

Three *to* the fourth (power) is 81. 3の4乗は81 ( $3^4 = 81$ ).

- 14 《米方言》...で (with)

an acre planted *to* wheat 小麦畑.

### III [接触+方向]

- 15 《接触》...に, ...に当てて (on)

press one's hands *to* one's eyes 目に手を押し当てる

nail a notice *to* the door ドアに掲示を打ちつける

dance cheek *to* cheek ほおを寄せ合って踊る.

- 16 《時間の終点》《fromとともに用いて》...まで (until); 《残りの時間・日とともに用いて》...

まで...分 [日・年など] ある

from Monday *to* Friday 月曜から金曜まで (▶通例金曜日を含むが, 明示するには《米》では (from) Monday through Friday, 《英》では from Monday to Friday inclusive という)

It is five minutes *to* [《米》 of] seven. 7時5分前です (▶7時まであと5分).

### IV [対比]

17 《比較・対比》...より, ...と比べて, ...に対比して

be superior to... ...よりすぐれている

This film is nothing (compared) to the one I saw yesterday. この映画はきのう見たのに比べるとまったくつまらない

Two is to four as three is to six.  $2:4=3:6$

The final score was one to nothing. 最終スコアは1対0だった

Ten to one I'd never be recognized. おそらく私だと気づく人はいまい (▶ ten [a hundred, a thousand] to one はしばしば否定語と用いる) .

18 《相対・対立》...に対して

be parallel to the railroad 線路に並行している

be opposed to the project 計画に反対する

be opposite to what one expected 予想に反する

stand face to face 向かい合って立つ

Line AB is at right angles to AC. 線分ABは線分ACに対し直角である.

19 《割合・構成》...につき

20 miles to the gallon (車の燃費が) 1ガロンにつき20マイル

The population is about forty to the square mile. そこの人口は1平方マイルにつき40人くらいです.

toの基本的意味は(1)の語義で言えば〈方向〉と仮定され、本質的には存在する2つのモノとモノとの方向関係を定めていると言えよう。すなわち、X to Yという連鎖があれば、それはXというモノとYというモノとの間にXがYの方に〈向く〉という関係が成り立つものと捉えられる。しかし、(1)のI[方向]からIV[対比]までの(さまざまな)意味が〈向く〉という概念あるいはイメージからどのようにして拡張されるのかを説明することは容易ではない。だが、(1)の1[到着点・行く先]から19[割合・構成]までの意味にたいしてtoという1つの語があてがわれているということは、Lakoff(1987)らの認知意味論の枠組で言えば、それら「方向・到達」から「比較・対立・関連」までの意味を覆う中心的な意味(central meaning)としてイメージ・スキーマが存在し、そのイメージ・スキーマから(1)で示されたIからIVまでの意味が拡張され、放射状のネットワーク(radial network)を構成するということになる。だが、本稿では、toの多義性をそのようなネットワークを構成するイメージ・スキーマを介した意味拡張から成るものと分析する是非の検討は別の機会に譲り、toがどうして今ある通りの多義性を持つのかを、主として推論という力に大きな役割を担わせて説明を試みることにする。

## 2. 操作子機能

英語の前置詞と日本語の空間辞との違いは概念的意味(conceptual meaning)を備えているかどうかにある<sup>2)</sup>。英語の前置詞には空間的意味が認められるが、日本語の空間辞には具体的に空間を示す意味が欠けているものが見られる。例えば、overやinは概念的意味を認知言語学流にイメージ・スキーマとし

て表すことができるが<sup>3)</sup>、「に」や「で」の意味は、田中（1997）や田中・深谷（1998）が主張するように、いくら追求したとしてもイメージ・スキーマとして描くことができない。このことを格という意味役割との関係から言い換えれば、例えば「に」自体に対して辞書が与えているような〈目標〉や〈原因〉などの意味を付与することはできないということになる。実際「に」には多様な用法があり、

- (2) a. 私はこの車を彼にもらった。〈起点〉
  - b. 私はこの車を彼にやった。〈受け手〉
  - c. 明日、そこに行く。〈目標〉
  - d. 彼女に同行します。〈随伴〉
  - e. 教員1人に学生50人を割り当てる。〈割合〉
  - f. 雨に濡れた服を脱ぐ。〈原因〉
- （田中 1987: 35-36）

このほかにもまだ「に」の用法のあることを考えると、その意味を分類することはほぼ不可能である。そのため、田中・深谷（1998: 86）は、「xに」の「に」は〈xを対象指定し、用言チャンク<sup>4)</sup>に差し向けよ〉という操作を要請する操作子であると主張している。

同じく「に」に固有の意味を求めることができないという立場を取っているのが、山梨（1993）である。彼によれば、例えば「雨に濡れる木々の緑」という表現における「雨に」は、雨の中で木々が濡れていると解せば〈場所格〉を表すが、雨のせいで木々が濡れていると解釈すれば〈原因格〉となる。名詞+助詞のこのような意味の多様性は助詞が固有に持つ意味の問題ではなく、問題の助詞がどのような名詞と組み合わせたり、そしてそれが納まる文が全体としてどのように解釈される可能性があるかというこの問題であると言う（山梨 1993: 45）。

では、これら「に」や「で」のように、英語前置詞と違って、概念的意味をスキーマとして表示できないような助詞の持つ役割は何であろうか。それは操作子機能にあると田中（1997）と田中・深谷（1998）は主張する。彼らによると、助詞は前置詞のような自立語ではなく、必ず「xが」「xを」「xに」のようにxの接尾辞として用いられ、所謂事態を構成する際に〈xをこれこれしかじかに取り扱えよ〉という要請をする操作子であると言う（田中・深谷 1998: 70）。

彼らの説明を引用すると、連体助詞「の」は、典型的には「xのy」という形式で使用され、複合名詞を形成する役割を担い、「xのy」の配列を意味変換するチャンキングのプロセスにおいて、xが取りまとめるチャンクの形成をひとまず保留したままで、yに引き渡し、yを受けて〈xのy〉という名詞チャンクを形成せよ〉という操作を要請する。「車と時計」と「車の時計」を比較してみると、前者が〈車〉と〈時計〉とがまったく別物である可能性があるのに対して、後者では〈車に付いている時計〉など、xとyとが融合されチャンクが形成される。それは、「xとy」が〈xとyを並置、連結せよ〉という操作を要請するため、xのチャンクとyのチャンクが独立して形成されるからである。それに対して「xのy」は、x独自のチャンクを形成することを保留する働きがあるため、yを受けて複合名詞のチャンクを形成しなければならないことになってしまう（田中・深谷 1998: 99）。そして、複合名詞のチャンクを形成する際の手掛かりは、「太郎の誕生日」「社会の敵」「助詞の理論」「作家の夏目」「ドアの鍵」「窓の霜」などに見られる解釈の多様性——xとyとの関係の多様性——を考慮すれば、経験知識あるいは社会通

念であることは一目瞭然であると言う（田中・深谷 1998: 99-100）<sup>5)</sup>。

この操作子機能について見過ごしてはならないところは、例えば「の」が名詞と一緒になってチャックを構成したときの意味役割が決まる過程に、経験知識からの推論が働いているというところである。田中（1997: 25）は、例えば、「箱のリング」と「箱の形」がその意味を獲得する上での差は、〈箱とリングは別物である〉ということと〈（ここでいう）形は箱の形である〉ということを経験的に知っているという差であり、さらに、〈リングは箱に入れられるもの〉という経験知識から、箱が〈場・位置関係を表す名詞〉として了解されることになると言う。また、「窓の霜」（frost on the window）「風呂の水」（water in the bathtub）「ドアの鍵」（the key to the door）のような複合名詞がそれぞれの意味を獲得することができるのも経験知識に拠るものだと主張する。そして、田中のこのような考え方は、寺村秀夫（1991: 239-240）が同じ「の」の意味の多様性について、その時代の社会常識のようなものが関与していることに起因しているため、包括的な形で意味を捉えることはほとんど不可能であると主張しているが、その立場に通ずるものである。

### 3. 手続き的意味（procedural meaning）

関連性理論（Relevance Theory）では、言語表現の中にはbook, love, forceなどのようにそれぞれの持つ概念を符号化（conceptual encoding）したものもあるが、so, therefore, and, but, nevertheless, wellなどの談話連結詞は概念的なことばで捉えようとするのが難しいため概念を符号化しているのではなく、その表現が現れる文や句をどのように解釈すべきかを手続き的に指示する機能を果たしているのではないかと考えられている。例えば、(3) のような発話は (4a) と (4b) の2つの解釈が可能であるが、そのとき (4) のそれぞれの前半と後半の命題がどのような関係にあるものとして意図されているかを指示する機能を持つものがsoやafter allのような談話連結語（discourse connectives）だという（Blakemore 1988: 190）。

(3) Ben can open Tom's safe. He knows the combination.

(4) a. Ben can open Tom's safe. So he knows the combination.

b. Ben can open Tom's safe. After all, he knows the combination.

すなわち、「soはそれが導入する命題が直接アクセス可能な何らかの命題（例えば直前に表現された命題）の文脈含意<sup>6)</sup>として解釈しなければならないことを指示することによって、その命題の関連性を制限する」表現であるという<sup>7)</sup>。

こうした考えの中で注目したいのは、(3) の発話にはsoやafter allが存在しなくても (4) で示されたような2つの意味解釈が存在することである。そしてその2つの解釈を可能にするのが推論である。すなわち、2つの命題が (3) のように並置された場合、それを聞いた聞き手は話し手の意図を推し測り、話し手がなぜその2つの命題をその順序で続けて配置したのかを聞き手が推論することを期待しているものと想像し、それらの命題がどのような関係にあるかを自分の経験知識<sup>8)</sup>を総動員し、推測などの思考過程を含む判断を経てその命題同士が語用論的に有意義である（pragmatically significant）と思われる



繋がり方について、ある特定の想定 (assumption) に辿り着くのである。つまり、聞き手は自分の経験したあらゆる知識に照らし合わせ、「ベンがトムの金庫を開けることができること」と「ベンがトムの金庫の番号を知っていること」との間に存在する、考えられそうで (conceptually possible) 自然な関係はどのようなものであるかを探り、1つは「ベンがトムの金庫を開けることができる。だから彼はトムの金庫の番号を知っていると言える (=ベンがトムの金庫の番号を知っていると言えるのは、彼がトムの金庫を開けることができるからだ)」という、最初の命題が後の命題に証拠を与える関係<sup>9)</sup> (= (4a)) と、もう1つは、「ベンがトムの金庫を開けることができるのは、彼がトムの金庫の番号を知っているからだ」という、後の命題が最初の命題の成り立つ理由を述べた関係 (= (4b)) という、2つの関係が可能だという結論に達するのである。

発話を解説するときに果たす推論の重要性をもう少しわかりやすく説明するために<sup>10)</sup>、次のような文によって表される状況を考えてみよう。

- (5) a. 私は休講した。  
b. 呑みすぎた。

この2つの文を一連の談話と見るとき、(5a) と (5b) の関係は時系列上連続して起きた出来事と捉えるのがもっとも自然であろう。つまり、(5a) と (5b) の出来事はそうやって並べられた順序で生起していると解するのがもっとも関連性が高いことになる。では次の例はどうだろうか。

- (6) a. 私は休講した。  
b. 呑み過ぎたんだ。

ここでは (6b) は (6a) の出来事の原因を表すと解するのがもっとも自然であろう。このような解釈に辿り着くのは、実は次のような推論が働いているからである。

- (7) a. 話し手は授業を休講した。  
b. 人は二日酔いが原因で仕事を休むことがある。  
c. 人は呑み過ぎると二日酔いになることがある。  
d. 話し手は呑み過ぎた。  
e. 話し手は呑み過ぎたため二日酔いになった。  
f. 話し手は呑み過ぎて二日酔いになったため授業を休講した。

ここで、文末辞の「んだ (=のだ)」は、それが付いた文を前の文にたいする証拠を与える関係にあるよう解釈するための手続き的制約を課していると考えられる。そのため、(7b) (7c) のような想定が記憶から呼び戻され、(7f) のような推意 (implicature)<sup>11)</sup> が導き出されることになる。

しかし、実はこの場合もまた、(6) の発話には「んだ (=のだ)」が存在しなくとも、つまり (5) のように発話したとしても、(例えば「休講した」と「呑み過ぎた」とがこの順序で継起したと

いう解釈に加え) (7f) で示されたような推意に辿り着くことができる。というよりは、「んだ」がなくとも (7f) のように解釈するのがむしろ自然と言うべきかもしれない。Abbott and Black (1986) が言うように、人はまとまった複数の出来事を単に時系列上の継起関係にあるものとして覚えるよりも、因果関係にあるものとしてその一連の出来事を覚える方が覚えやすいのである。この線に沿って上の (5) の解釈が (7f) になるのを説明すると、人は外界を認知する際にその枠組となる知識構造を利用するが、2つ以上の出来事を捉えるときは因果関係スキーマを用いる傾向にあり、その2つの出来事が特定の順序で発話された場合、2番目の文が最初の文を説明しているものと解釈する傾向にある、ということになる。このように考えると、人は連続した発話 (5a) (5b) を解読するとき、できるだけ合理的で効果的な理解の仕方を得ようとするため、この因果関係スキーマを用い、文化的・慣習的に確立された、世界についての百科事典的知識 (encyclopedic knowledge) を含む経験的知識を総動員し、(7) に示されるような推論 (田中・深谷 (1998: 22-23) のことばを借りれば、情況編成の中で「辻褄合わせ」を志向した記憶連鎖の引き込み合いによって記憶を加工・変形・編集する作業 (= 意味づけ)) を行い、もっとも関連性の高いと思われる推意 (= (7f)) を導き出すのである。このようにして、発話解釈にあたって大きな働きをするのが推論という認知過程であり、話し手は聞き手が持つ強力な推論能力に依存して言語表現行為を行うこととなる。

#### 4. and の手続き的意味

関連性理論では、前置詞 and に伴う語用論的意味は、自由拡充 (free enrichment) によって命題内容に寄与するものと見なされるべきであると主張されている (Carston 2002)。実際、and にはいろいろな用法がある。

- (8) a. 5 and 5 makes 10.  
 b. Miss another class and you'll fail.  
 c. Stand over there and (then) you'll be able to see it better.  
 d. Wait and see what happens.  
 e. The pain is getting worse and worse.  
 f. I like city life but there are cities and cities.  
 g. The Cabinet Ministers were coming and going from No. 10 Downing Street all afternoon.  
 h. She was very careful, and the result was a complete failure.  
 i. He tried to run five miles and couldn't.

(8a) の and は足し算のプラスを意味しているので and の前後を入れ替えても意味に変わりはない<sup>12)</sup>。しかし、(8b) ~ (8d) は and の左側の命題と右側の命題の起こる順序は左側の方が先行していると考えるのが自然である。それは (8c) のように then が使われるとあっちはっきりする。そのような時間的先行関係において違いを見せるだけでなく、(8b) (8c) では左側が原因で右側が結果を、(8d) では右側が目的を表すと考えられる。(8e) では時間的順序関係に関わることなく、同じことばを繰り返す



ことで繰り返し続けることが意味される。(8g)でも同じくandの左側と右側とが時間的先行関係になく、日本語で「行ったり来たりする」というように語順が固定された凍結句を表し、やはり(8e)同様繰り返し続ける行為を表す。(8h)(8i)はandをbutで置き換えてもよさそうなくらい、前半と後半とは対照的な意味を表すよう解釈するのが自然である。

こうやって見ると、andが多義であるとしても、bankのような語が概念的意味として多義であることとはいささか趣が違ってくる。なぜならば、andは(8b)(8c)のような場合だと因果関係を意味するが、(8h)(8i)のような場合だと逆接の意味を持つからである。となるとCarston(1998)は、こうした反対とも思えるような意味を含む「多義性」を持つandに対しては、プロトタイプのあるいはスキーマ的な意味を基にしたネットワーク分析を適用するのは困難であると考え、関連性理論では、andは上述したような手続き的情報を符号化していると考えに至った。Carstonは、人がA and Bという発話をするとき、AとBにはandという記号で結びつけられるある種の関係があるので、A and B全体をひとつのまとまった処理単位と見なし、関連性の原則に一致するよう推理を働かせよと指示していることになり、AとBとがどういう関係になるかは聞き手の持つコンテキスト<sup>13)</sup>に照らしてわかるはずだと言う。つまり、andはsoなどと同じように、聞き手に向けた解釈の仕方についてのいわば案内になるということである。

(8c)を例に取れば、聞き手は「あっちに立つように言われていること」と「それがよく見えるようになること」との間にはある種の関連性が存在すると話し手から言われていることになるため、その2つの事態の関係を有意義なものになるよう推論を働かせるのであるが、人はふつうあることをするようと言われると、なぜそのような内容の指示を受けたのか、話し手の伝達意図を探ろうとするものである。しかし、上述したようにandはそれが結んだ命題あるいは概念同士を単一の処理単位として扱うことを要求するため、話し手の狙いを探るヒントとしてandの後半の命題にも同時にアクセスし、その2つを最善の関連性を伝達するものとして処理をしなければならなくなる。そうすると、「あっちに立つように言われている」のは「それがよく見えるようになる」からだという解釈を得ることになる。経験知識から、移動すれば映る景色も違うことがわかっているためである。こうやって(8c)は、thenをandの後ろに挿入できることからわかるように時系列での継起的出来事を表すものと解せるのだが、ただそれだけでなく、後半の命題が理由も表すことができることが説明されることになる<sup>14)</sup>。

## 5. toの操作的意味機能

ここまでは、助詞の操作子機能と談話連結詞の手続き的意味を概観し、発話を解釈するにあたっては、推論という認知作用が大事な働きをしていることがわかった。そこで次に、前置詞toの表す意味に推論がどのように関わり合いを持つものか探ってみることとする。

英語の前置型所有格表現についてKempson(1977: 125)は、その意味が不確定的もしくは曖昧であるため、どのような手立てを用いてもその意味特性を説明することは不可能であると言っている。前置詞toについても、『プログレッシブ英和辞典』あるいは次に短くまとめて引用する『CD-ROM版ジーニアス英和大辞典』(2002)に見られるようにその意味は多岐にわたるため、それらの間がどのように関連づけられるのかを確定するのは困難なように思われるかもしれない。

- (9) a. John walked to the station. [到達]  
b. Put your ear to the door. [接触]  
c. The glass was smashed to bits. [結果]  
d. The design has to appeal to all ages and social groups. [動作の対象]  
e. Our team won by a score of six to five. [比較]  
f. They sat down to a game of bridge. [目的・意図]

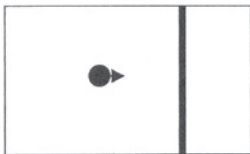
しかし、同じ1つの語が用いられている限り、それらの意味関係を説明するなんらかの原理があるのではないかと思うのもまた自然なことである。本稿では、前置詞toは次のような意味を有すると仮定する。

- (10) 前置詞toの意味：

モノXとモノYが前置詞toによってX to Yと関係づけられた場合、XはYに方向付けられていることを意味する<sup>15)</sup>。

ここでいうXとYは、それぞれ認知言語学の理論的枠組でいうところのトラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark) にほぼ対応すると言ってよい。そして、(10) で述べたtoの意味をイメージ・スキーマ化するならば、Tyler and Evans (2003: 148) が描いているように、次のように表されよう<sup>16)</sup>。

- (11) toのイメージ・スキーマ：



さらに、府川 (2004b) で論じられたように、多くの前置詞には次のような操作的意味機能があり<sup>17)</sup>、to もそのひとつである。

- (12) 前置詞の操作的意味機能：

前置詞Pによって相対的に位置づけられたXとYが与えられたら、XとYを前置詞Pの持つ意味を基にして経験的知識/常識に照らし、語用論的に有意義な仕方に関連づけ、もっとも自然な命題/情報を導き出さない。

以下では、前置詞toがこのように操作的意味機能を持つものであると仮定すると、どのようにしてtoの持つ多岐にわたる意味が派生されるようになるのか見ていく。

## 5.1 到達・接触

前置詞toが上述したように操作的意味機能を持つものであるとなると、X to Yの意味は、まずは (10)

によりXがYに方向付けられるという意味が形成され、そこに(12)の操作により、XとYが収まる文全体というコンテキスト、さらに常識あるいは文化的・慣習的に確立された、世界についての百科事典的知識という広い意味でのコンテキストに照らし、XとYの関係を有意義で関連性の高いものになるように推論(田中・深谷(1998: 22-23)のことばを借りれば、状況編成の中で「辻褃合わせ」を志向した記憶連鎖の引き込み合いによって記憶を加工・変形・編集する意味づけ作業)を行うこととなる。その結果、うまい具合に尤もらしい命題が導き出されればそのXとYを含む文(全体命題)が意味的に容認され、そうでなければ容認されないこととなる。そして本稿では、『プログレッシブ英和辞典』が(1)で示したtoの語義として定義づける「到着点・行く先」から「割合・構成」までの様々な意味は、つまるところ、(10)によって得られたtoの意味が、(12)の指示により、一般常識やさまざまな経験に基づいて形成され蓄積された百科事典的知識を含む経験的知識に基づいた推論を働かせ、XがYに有意義に関連づけられて自然に導き出されたものであると論ずることとなる。かくして、発話解釈にあたって大きな働きをするのが推論という認知過程であり、話し手は聞き手が持つ強力な推論能力に依存して言語表現行為を行うこととなる。

では、具体的な分析例を見ていくとしよう。前置詞toを含む(13a)のような文は(13b)のように分析される<sup>18)</sup>。

- (13) a. John walked to the station.  
b. [<sub>X</sub> John walked] [<sub>P</sub> to] [<sub>Y</sub> the station].

すると(13a)は(10)によって、(13b)におけるXにあたる「ジョンは歩行した(John walked)」という命題成分がYの「駅(the station)」という命題成分に向かって方向付けられているという意味、すなわち「ジョンは駅に向かって歩行した」と解される。さらにそれが(12)の適用を受け、語用論的に有意義な意味になるよう推論を働かせることになるのであるが、その推論は、「歩くという活動はふつう或る場所に到達するものと考えられるが、ジョンが歩くことが駅に方向付けられていれば、駅が着点であろう。そして、その行為が過去の出来事として表現されているということは、それが完了した、つまり駅に到着したと考えるのがふつうである。そしてその通り、その文の発話直後にその出来事が取り消されていない。よって、ジョンの歩行は駅まで続いた」となり、(13b)の場合のY(=ランドマーク)が到着地点を表していることが推論の結果として自然に得られた意味であると説明されることになる。

ここで正確に理解しておかなければならないのは、多くの英和辞書に記載されているtoの「到着」の意味用法というのは、移動を表す動詞と一緒に使用されれば必ずtoの目的語であるランドマークYに到達しているとは限らないということである。つまり辞書が到着の用法として挙げている例はみな、文全体の意味するところを常識などに基づいて推論すれば「到着」が含意されるか、あるいは「到着」が必然的に意味されるかに過ぎないということである。実際に到達しないことはいくらかもある。次の例を見てみよう。

- (14) a. Jack threw the ball to the catcher, but the throw went wide and he couldn't catch it.  
b. I handed the sandwich to him, but he couldn't take it, because his hands were tied.

- c. Tim pulled a handkerchief from his pocket and gave (= handed) it to Linda, but she couldn't hold on to it and it fell to the ground.

これらはみな物を移動させる意味の動詞が使われているが、移動するものはYのところに届いていないことを示している。さらに次のような例では、移動する物は届いても届かなくてもよいと理解される。

- (15) a. Neal sent a package to Ann, but she never got it.  
b. Neal sent a package to Ann, and she got it for sure.  
(16) a. I pushed the empty shopping cart hard to Mary so it reached her.  
b. I pushed the empty shopping cart to Mary, but it stopped halfway between us; I didn't seem to push it hard.

これは、物を投げたりあるいは送ったりしても、それが投げたり送ったりした人のところから離れることを保証されたとしても、物が軌道をそれたり途中で止まったりして、目的とするところまで届くとは限らないことを常識的に知っているからである。toがランドマークへ向かう単なる方向付けを表し、その後ろの名詞句が到達点(goal)になりうる方向(direction)の先に有るモノを表しているだけで、ランドマークまでの到達を保証するものではないという所以である。

一方、次のような例ではtoのランドマークYが必ず到達点を表すと考えられている。

- (17) a. \*Ted gave the money to Sue, but she { refused / didn't take } it.  
b. \*Neal donated \$100,000 to the charity, but they didn't { get / accept / receive } it.  
c. \*Dwight sold the car to Jane, but she didn't { get / buy } it.  
d. \*He lent a book to her, but she didn't take it.  
e. \*He gave her ticket to the woman at the check-in desk, but she didn't take it.

これは、譲渡したり、寄付したり、売ったりあるいは貸与したりすれば、移動していく物は必ず移動先に届くか所有領域に入ること、動詞が固有に持つ概念的意味として保証しているのを知っているからである<sup>19)</sup>。

また、次のような例が、but以下の文で、前半で述べている意味内容を取り消したがために矛盾したことを表すようになってしまうことからわかる通り、動詞putにはその内在的意味特性として必ずどこかにモノを移動させ、そこに落ち着かせるという意味がある<sup>20)</sup>。そのため(18a)が「接触」の意味を持つと解されるのは、putの動作を受けた耳が必ずドアに移動し、そこが移動の到達する場所となっていることを知っているためである。

- (18) a. \*He put his ear to the door but no sound came from inside.  
b. \*I put the kids to bed, but in fact they didn't go to bed.  
c. \*They put him to death by hanging, but in fact he wasn't killed.

そして put と同じように、やはり動詞自体の内在的意味が、移動するモノの到達ないしは接触を義務づける例がほかにもたくさんある。

- (19) a. The airplane lost one wing and fell to the ground.  
 b. The silver coin sank to the bottom of the fountain.  
 c. The Mississippi flows to the Gulf of Mexico.  
 d. The little girl held tightly to her mother's hand.  
 e. The bubble gum stuck to his shoe.  
 f. A message had been pinned to the notice board.  
 g. He tied the dog's leash to the post.  
 h. Attach this rope to the front of the car.  
 i. Add some pepper to the soup.

(19a) から (19c) のような例では、動き続けていく物はそれを止める物のところに到達しないと止まらないので、Y が到達地点となる。(19d) では、しっかり掴むためには掴む対象が必要となるから接触を表す。(19e) から (19h) のように、物を貼ったり付けたりするには接触する対象が不可欠である。(19i) のように、物を足したり加えたりするのも同様である。それゆえ、Y はモノの接触を受ける着点となる。

次のような例は、モノが移動するというよりはむしろそのモノを追いかけていく視線が移動すると考えられるのであるが、これも Y が到達点として捉えられなければならない。

- (20) a. This road leads to the main gate of the university.  
 b. Her hair fell to her waist.

(20a) で道は必ずどこかに通じていて、(20b) では髪の毛の長さを述べているからである。

さらに (1) の、『プログレッシブ英和中辞典』の語義の2の「《方向・方角》…へ、…の方に [へ]」のところで挙げられている次のような例を見てみよう。

- (21) a. He lives to the north of the city.  
 b. Turn to the left at the first corner.  
 c. She stood with her back to the fire.  
 d. He had his back to the wall.

(21a) のような例で Y が到達点、すなわち Y への接触を表していないのは、東西南北という方角や方位の概念は、ものの運動や位置をとらえるうえで、空間に意識される線が向いているところを指し、問題となる方向というのはその線の延長線へと際限なく続いていて明確な到達点がなく、したがってそちらに向かって行けども行けども、行き着くところがないからである。(21b) のような左・右の方向という概念についても同じようなことが当てはまる。また、(21c) のような場合に接触を意味していないのも、

(21a) (21b) と同じく、方向を表しているからである<sup>21)</sup>。(21d) だと、背中が向く先には壁しかなかった、つまり背水の陣に置かれた状態を表していて、必ずしも背中が接触している必要がないからである。

このように考えれば、次のような例でYが「到着点」を示すといわれるのは、あくまでも語用論的推論の結果としての解釈でしかないことがわかる。

(22) He went to the station.

この文の字義通りの意味としては、「彼の移動行為」が「駅」に「向けられていた」ことを表しているにすぎないのであるが、移動行為が過去のものとして表現され、成就に関して失敗したと言っていないので、「駅に向かって行ったのだから自然な成り行きの帰結として到着したのだろう」と、移動行為の完遂を推測する結果、Yが到達点を表すという解釈に行き着くことになるのである<sup>22)</sup>。

以上見て来たとおり、モノXという意味成分とモノYという意味成分が前置詞toによって[<sub>x</sub> モノ] [<sub>p</sub> to] [<sub>y</sub> モノ] と関係づけられた場合、字義通りにはXはYに方向付けられていることを意味するだけで、移動するモノがYに到達、すなわち接触するという意味、あるいはXがYに到達するかどうかということも、言語文脈あるいは一般常識やさまざまな経験に基づいて形成され蓄積された百科事典的知識を含む経験的知識に基づいた推論を働かせてXがYに有意義に関連づけられ、その結果として自然に導き出された意味であることがわかった。

## 5.2 結果

前置詞toにはまた、(9c) や次のような例に代表されるような「状態・境遇などの変化の結果」を表す意味があるといわれる。

- (23) a. The vase has broken to pieces.  
b. The lights changed from red to green.  
c. He was sentenced to death by electrocution.  
d. They were reduced to begging in the streets.  
e. The hunter shot the bear to death.

(23a) は、(10) によってXの「花瓶がこわされたこと」がYの「(粉々の) 破片」に方向付けられるという意味が形成され、これに(12) の操作を適用すれば、花瓶が壊れれば複数の破片へと変化することがあるのを経験的知識によりわかっているので、「花瓶は割れて粉々になった」という語用論的に有意義な意味、すなわちYが花瓶の割れた結果状態の意味であると容易に解釈することができるようになる。

(23b) は、動詞そのものの概念的意味が変化を描くため、その意味構造上、(変化前と) 変化後の状態がどのようなものであるかについての情報が必要なのをわれわれは知っている。それゆえ、Xの「交通信号は赤から変わったこと」がYの「青 (という色の状態)」に方向付けられるという意味が形成されれば、その知識に基づき、Yが変化の結果状態を意味するものと容易に解されることになる。

(23c) から (23e) についても、被告が判決を下されればその中身がその被告が処される結果を表す



ことを知っているし、人が落ちぶれると、通りで物乞いをするような境遇に墜ちることもあることを知っているし、猟師が熊を鉄砲で撃って弾が当たれば、その熊を死に追いやることのあることをわれわれは知っている。こうしてtoの「結果」としての意味は、文全体の意味をわれわれの経験に基づく常識に基づいて判断すれば、自然な帰結として得られる意味だということがわかる。

### 5.3 目的・意図

前節の「結果」とここでの「目的」とは相反する概念のように思えるかもしれない。しかし、結果というのは目的が達成された後の状態のことを指していることを考えれば、toの意味用法に一見矛盾したと思われる概念同士が共存していることに不思議さはなくなる。つまり、toの用法に「結果」があれば「目的」の用法があってもおかしくないということである。

- (24) a. He goes to work by bus.  
 b. I just sat down to dinner.  
 c. People rushed to her rescue and picked her up.

(24a) では、(10) によって「彼が移動すること」が「仕事」に方向付けられているという意味が形成され、その意味に(12)を適用すると、移動には目的のあること、そしてその目的のうちで馴染みのもののひとつに仕事があることを経験的知識から知っているの、移動する目的が仕事であることを表すのに「仕事に出かける」という語用論的に有意義な意味を得ることになる。(24b) では、「今し方席に着いたこと」が「夕食」に方向付けられているという意味形成がなされ、そしてその意味を経験的知識に照らせば、語用論的に有意義な「ちょうど夕食を取ろうとして椅子に座ったところだったんです」という、Yを目的とする意味に落ち着く。(24c) では、「人が急行したこと」が「彼女の救出」に方向付けられているのであるから、常識的に判断すれば、急行する目的が彼女の救出にあることになる。かくして、toの目的用法は常識という経験的知識を基にして判断した自然な帰結として説明されることとなる。

### 5.4 動作の対象・ほか—必然的解釈の結果としての意味

以上見て来たとおり、モノXという意味成分とモノYという意味成分が前置詞toによって [<sub>X</sub> モノ] [<sub>P</sub> to] [<sub>Y</sub> モノ] と関係づけられた場合、字義通りにはXはYに方向付けられていることを意味するだけであるが、そこに(12)の操作的意味機能が働き、言語文脈あるいはさまざまな経験に基づいて形成され蓄積された百科事典的知識を含む総経験的知識に基づいた推論を働かせることで、XをYに有意義なかたちで関連づけ、その結果として自然に導き出された意味が「到達」や「結果」や「目的」であることがわかった。この節ではさらに、toにあるといわれる各種意味用法が、動詞の内在の意味や動詞を中心とした文全体の意味を、一般常識あるいは経験的知識から成るデータベースとの照合に基づき、語用論的に有意義な、尤もらしい解釈に辿り着くよう推論を働かせた結果、自然に導き出された意味であることを示してみる。

次のような例を見てみよう。

- (25) a. She appealed to her former husband to return their baby son.  
b. Joe shouted to me.  
c. Mike is being kind to the old.  
d. It was a threat to world peace.  
e. My father would object to that question!  
f. He agreed to my proposal.  
g. The company replied to our inquiry promptly.  
h. Let us drink to the bride and groom.

(25a) から (25g) のような例では、例えば「訴えること」や「大声を上げること」や「親切にすること」や「反対すること」などの動作や行為は、それらの動作・行為の性質上、働きかける対象をどうしても必要とする。それゆえ、XがYに方向付けられるとき、われわれはtoの目的語であるYが「動作の対象」という解釈を受けることが自然であると判断できるのである。また、(25h)でも「グラスの中身を空ける」動作が「花婿と花嫁」に方向付けられているのであるから、新郎新婦に向かって乾杯するという、いわば「好意を示す対象」としてYを捉えるのがもっとも自然な解釈となることが説明される。

次のような例でも、動詞を中心としてまとめられたXの意味が、Yとの相対的關係を常識などに照らしてもっとも語用論的に有意義で自然な意味を得ようとすれば、Yを「程度」や「限界」の意味に導いてくれる。

- (26) a. I'm chilled to the bone.  
b. The promotion increased her salary to \$50,000.  
c. The game lasted to 10 : 30.

(26a) では「体が冷えていること」が「体の中の骨」に方向付けられているという意味が形成され、そこに操作的意味機能が適用され、常識に基づき尤もらしい命題を推論で導こうとする。すると、寒いと感じるのはふつう皮膚の表面なのであるが、その感じ方が皮膚を通り越した中にある骨に向けられているということ、そして寒さについてわれわれが関心をもつのがどのくらい寒いのかという寒さの程度であることを考えると、骨にまで達する程度まで寒い、つまり芯まで冷えていることを述べているのであろうと推論する。それゆえ、Yが「程度」を表すことが説明される。(26b) では、「昇進によって彼女の給料が上がること」が「5万ドル」に方向付けられていれば、常識的には、昇給という概念が増え幅という程度を表さない限り意味をなさないと判断できるため、Yは「程度」を表し、また (26c) のような例では、「続いている試合」はいつか終了しなければならず、そして続行していることを中止するには時間上の区切りが必要になるため、Yは自然の帰結として「時間の区切りである10時半まで延長する」という「限界」の意味に落ち着く。

次の例を見てみよう。

- (27) a. Your computer is connected to the main network.

- b. She is married to an American lawyer.
- c. There are only five days to the wedding.
- d. Children were dancing to the music.
- e. We had the whole house to ourselves.
- f. Add salt to taste.
- g. The way to happiness is contentment.

(27a) でXの「コンピュータがつながっていること」がYの「ネットワーク」に方向付けられているのであれば、ネットワークは「接続先」と解するのが自然で、(27b) で「彼女が婚姻関係にあること」が「アメリカ人」に方向付けられているのであればそのアメリカ人は「結婚相手」であろうということになり、(27c) で「5日しかないこと」が「結婚式」に向けて方向付けられているのであれば、5日間は「残された時間の限界」を意味すると思うのがいちばん自然である。また (27d) で「子供たちが踊っていたこと」が「その場の音楽」に向けて方向付けられているのならば、音楽に注意を向け、それに「合わせて」踊っていたのであろうし、(27e) で「家をまるごと自分たちの所有領域に収めていたこと」が「自分たち自身」に向けて方向付けられているのであれば、家についての一般常識から判断すれば、その家は自分たちの住居として独占的使用の状態にあったということだろうし、(27f) で「塩を加える行為」が「好み」に向いているのならば、好みに「合わせて」塩を足すということになるだろう。そして、一般に道は必ずどこかに通じ、そこに連れて行ってくれるもののだということを知っているので、(27g) の「道」が「幸福」に向いて方向付けられているのならば、その道を行けば目的地に到着するのであるから、「幸福」は「到達目標」ないしは「結果の状態」を表していると考えるのが自然ということになる。

さらに次例を考えてみよう。

- (28) a. There are 100 pence to the pound.  
 b. There are 2.54 centimetres to an inch.  
 c. This car does 25 miles to the gallon.

(28a) では、Xの「100ペンス存在していること」がYの「ポンドという貨幣制度」に方向付けられるという意味が形成される。われわれは貨幣という概念においては価値につながる量が大事な情報であることを知っていて、その量を計るにあたっては基準となる単位が必要なことを知っている。そしてポンドという貨幣制度における単位は1ポンドであることを知っているので、「100ペンスの存在」が「ポンドという貨幣制度」に方向付けられているということは、「100ペンスの存在」が「ポンドという貨幣単位のスケール上を1ポンドという単位に向かって行く」ということ、つまりその向かう先の到達点が1ポンドということになり、それは結局、100ペンスという量が1ポンドという量を計る単位と考えることとなる。(28a) の文の意味が「100ペンスで1ポンドになる」という所以である。このようにして経験的知識を基に、XとYを語用論的に有意義な仕方に関連づけるようにすれば、もっとも自然な命題を導き出せ、toにあるさまざまな意味用法が、動詞の内在的意味や動詞を中心とした文全体の意味にたいして、経験から蓄積された知識に基づき、語用論的に有意義な、尤もらしい解釈に辿り着くよう推論を

働かせば、自然に導き出てくる意味であることがわかった。

## 5.5 不定詞節の副詞的用法

不定詞節の副詞的用法にはいろいろな意味があるといわれる。次は、『プログレッシブ英和中辞典』(1998)からの引用例である。

(29) 《副詞的用法》…するために、…して、…すると

The policeman blew his whistle (in order) to stop the car. 警官は車を止めるために笛を吹いた《目的》

I awoke to find a burglar in my room. 目が覚めると部屋にどろぼうがいた《結果》

I was delighted to see him. 彼に会ってうれしかった《原因・理由》

What a fool Joan was to marry that man! あんな男と結婚するなんてジョーンはばかだ《判断の根拠》

He is free to go there. 自由にそこへ行ける《限定》

The rope wasn't strong enough to support the two men. ロープは2人の男を支えるだけの強さはなかった《程度》

To speak frankly, I don't quite like the idea. 率直に言ってその考えはあまり気に入らない《独立不定詞》

このように、不定詞構文の主節と不定詞節との意味関係にはいろいろとあることが見られるが、実はこの意味関係はwith分詞構文の主節と分詞従属節との間の意味づけと同じで<sup>23)</sup>、with分詞構文における主節にたいする従属節の意味が決まるのに推論の力が働いているのと同様、不定詞構文における不定詞節の主節にたいするさまざまな意味は、言語文脈あるいはさまざまな経験に基づいて形成され蓄積された経験的知識に基づいた推論を働かせ、不定詞節と主節の間に有意義に関連づけ、その結果として自然に導き出された意味なのである。

次のような例を考えてみよう。

(30) a. He didn't think to lock the door. […するのを覚えている (remember)]

b. I never thought to search the house. […するのを思いつく]

c. I had not thought to find you at home. […することを予期する (expect)]

d. I thought to return early. […するつもりである (intend)]

これらはみな同じthinkという動詞が使われているが、それぞれ微妙に意味が異なる。しかし同じ1つの語が使われているからには共通性があるはずで、それはみな、不定詞節がthinkという思考活動が「向けられる対象」を示していることである。それもそのはず、不定詞節に用いられるtoは元々前置詞であったため、その意味がいまだに残っているからである。それゆえ、不定詞構文についても、前置詞toを含む文に適用されたのと同じ規則が働くこととなる。つまり、(30d)の例を取るならば、それは次のように分析され、

(31) [<sub>X</sub> I thought] [<sub>P</sub> to] [<sub>Y</sub> return early].

それが (10) によってXの「思考活動を行ったこと」がYの「早く帰ること」に方向付けられているという意味が形成され、そこに (12) の指示により、XとYとを有意義な仕方で関連付け、もっとも自然な命題を引き出すよう経験知識に基づく推論を働かせるということになる。その結果 (30d) は、「早く帰るつもりであった」というまともな命題として解されることになるのである。

さらに次のような例を見てみよう。

- (32) a. We sent him to buy beer.  
 b. I want to leave now.  
 c. I'm happy to be here.  
 d. She was foolish to go there.  
 e. It was too hot to go out.  
 f. You are not to talk during the exam.  
 g. I got up early to catch the train.

これらの例に共通することは、Xとして述べられていることがみなYとして述べられていることに向かっていることである<sup>24)</sup>。(32a)では、「彼を送ったこと」が「ビールを買うこと」に方向付けられているという意味が形成され、その意味について経験的知識に基づいて考えると、われわれは「ビールを買いに行かせた」というふうに、不定詞節のYは使役の被動者が向かう行為を表す意味に解される。(32b)では、「私が欲すること」が「いま出かけること」にたいして方向付けられているという意味ができ、それを常識的に考えれば「今出かけたい」という自然な意味が導かれ、Yは「主節主語の望みが向けられる行為」を表していると解釈される。(32c)では「嬉しいという気持ちのあること」が「ここにいること」に方向付けられていることとなり、そこからは「ここにいられて嬉しい」というように、Yは「主節主語の気持ちが向けられる事態」という意味となる。そしてここで付言しておきたいことは、(32c)を今述べたように分析すれば、次のような例において、不定詞節が主節の表す時よりも前の出来事を表すことを阻まないことが自然に説明されるということである。

(33) I'm glad to have met you.

このような例の本稿での分析は、Xの「嬉しいという今の気持ち」が「あなたに会うことが完了したこと」に向けられているということになるので、Bolinger (1977) が言うように、不定詞節は仮想的(hypothetical)意味を有するという仮説で説明できなかったことも説明可能となる。

(32d)では、「彼女は愚かであると話者が判断していること」が「そこに行く」ことに向けられているという意味が作られ、そこからはごく自然に「そんなところに行くなんて彼女はバカだよ」と、Yの意味は「話者の判断が向けられる事態」ということになる。(32e)では、「あまりにも暑かったという話者の評価」が「外出すること」に向けられているという意味が形成され、そこから常識的判断により「出かけ

るには暑すぎた」と、「主節命題の表すことが向けられる事態」をYが表していることとなる。(32f)では、Xの「あなたが存在していること」がYの「試験をしている間に話をする事」に方向付けられていないという意味、すなわち「あなたの存在は試験中におしゃべりをする事に向いていない」という意味がつくられ、それにたいして一般常識的推論が適用されると、「試験中に私語をしてはいけません」というふうに、Yは「主節主語の存在の意義が向けられない事態」を意味することとなる。(32g)では、(10)により「早起きしたこと」が「列車に間に合ったこと」に方向付けられるという意味が作られる。これに(12)の操作が適用され、経験的知識を総動員し、推論による意味づけを行い、もっとも関連性の高いと思われる命題を導き出すことになる。人はtoによって結びつけられた連続する2つの出来事を捉えるとき、できるだけ合理的で効果的な理解の仕方を得ようとして因果関係スキーマを用いる傾向にあるのだが、この2つの関係をそのスキーマで捉えたとき、「列車に間に合ったこと」を「早起きしたこと」の原因とするよりも、「早起きしたこと」が「列車に間に合ったこと」の原因とするほうが自然であると考え。またその他の関係、例えばその2つの命題関係を「それなのに」あるいは「にもかかわらず」という「逆接」などの間柄にあるものとして意味づけることは難しいと判断される。よって、(32g)は「早起きしたので列車に間に合った」のように解釈され、Yは「主節主語の行為が原因となって引き起こされる結果」を表しているとみなされる。しかし、5.3節で指摘したことであるが、結果というのは目的が達成された後の状態のことを指していることを考えれば、Yの不定詞節は目的を表していると言っても差し支えないことになる。(32g)が「列車に間に合うように早起きした」と、目的の意味でも解される所以である。

このようにして、不定詞構文の主節Xと不定詞節Yとは、不定詞節のtoの意味と前置詞toの意味とが同じであり、そのことから形づくられた意味にたいして前置詞一般のもつ操作的意味機能が働き、さらに、われわれの経験的知識を基にしてXとYを語用論的に有意義な仕方に関連づけるよう推論すれば、不定詞節の副詞的用法のさまざまな意味が自然に導き出されることがわかった。

## 6. おわりに

英語の前置詞は日本語の助詞と異なり具体的に固有の概念的意味を有すると考えられていて、場所を表す前置詞をはじめとし、多くの前置詞についてその主張は当てはまるものと思われる。しかし、中にはイメージ・スキーマのようなかたちで概念的意味を持ちながらも、関連性理論で言うところの手続き的意味あるいは田中・深谷(1998)が論ずるところの操作子機能も兼ね備え、その意味内容を導出するのに推論が大きな役割を演じているのではないかと思われるものもある。ここでは、そのうちのひとつに当たるのが前置詞toであり、その意味は次のように定義づけられると論じ、そして(12)の操作によって推論を働かせた結果、toのさまざまな意味が導き出されると論じてきた。

### (10) 前置詞toの意味：

モノXとモノYが前置詞toによってX to Yと関係づけられた場合、XはYに方向付けられていることを意味する

### (12) 前置詞の操作的意味機能：

前置詞Pによって相対的に位置づけられたXとYが与えられたら、XとYを前置詞Pの持つ意味



を基にして経験的知識/常識に照らし、語用論的に有意義な仕方に関連づけ、もっとも自然な命題/情報を導き出さない。

本稿は、紙幅の関係で、辞書的定義として (1) に引用した『プログレッシブ英和中辞典』(1998) による to のすべての意味を操作的意味機能という視点から説明することはできなかった。しかし、典型的な事例についてはなぜそのような意味を持つと解釈されるに至るのかということの、基本的考え方だけは示せたものと信じたい。今後、ここで呈示したような分析方法が、他の前置詞の意味機能を解明するのに新たな光を当てることを願っている。

## 注

- 1) 例は一部省略してある。
- 2) 日本語のどの助詞が空間辞と認定できるかという基準については田中 (1997: 23-24) を参照のこと。
- 3) イメージ・スキーマを用いた分析については, Brugman (1981), Herskovits (1986), Lakoff (1987) らを参照のこと。
- 4) チャンクとは、事態を構成する際にまとまったかたちで意味素材になるものを言う (田中 1997: 15)。
- 5) 助詞の操作子機能の詳細な具体的説明は田中・深谷 (1998) を参照のこと。
- 6) 文脈含意とは、処理の対象である発話の命題 (新情報) と文脈既存の想定 (旧情報) を前提として、演繹推論の結果引き出される帰結のことである。
- 7) 概念的意味とは別に手続き的意味が存在すると考えることの妥当性について、その議論の詳細は Blakemore (1988), Carston (2002) を参照のこと。
- 8) 経験知識には、一般常識やさまざまな経験に基づいて形成され蓄積された、百科事典的知識も含まれる。
- 9) この関係には因果関係も含まれる。つまり、so はただ手続き的意味を持つだけなので (i) のように so の後続命題は先行命題を証拠としてそこから引き出された帰結であると解されることも、また (ii) のように so の後続命題は因果関係の結果として解され、先行命題はその原因と見なされることもある。
  - (i) There was \$5 in his wallet. So he hadn't spent all the money.
  - (ii) a. You're no longer a little kid. So you must make up your own mind.  
 b. My knee started hurting so I stopped running. Blakemore (1988: 184)
- 10) 推論は発話を解読するときだけに重要な働きをするのではない。実は、話し手は、ある一定の推論を聞き手がしてくれるであろうと期待して伝えたい意味内容を言語記号化しているわけであるから、推論は発話にとっても大事な役割を果たしていると言える。
- 11) 「推意」は一般的に語用論でいうところの「含意」に相当し、いわば言語形式からだけでは論理的に到達できない、直接表されていない意味のことである。もう少し限定的に使われている関連性理論での推意については、Sperber and Wilson (1995: 182), Carston (1998: 86) を参照のこと。
- 12) 足した結果は同じでも、厳密に言えば、元から存在している数にたいして数を足すことになるので、異なる状況を描写する場合もある。
- 13) 関連性理論においては、発話の解釈に当たっての手助けとなる、聞き手の頭の中から取り出された記憶、あるいは一般常識や様々な経験に基づいて形成・蓄積される百科事典的知識などをまとめて想定 (assumptions) と呼び、このような想定をコンテキストと呼ぶ。
- 14) (8c) は、通例 and で結ばれた後半の文が理由を表すものと解釈されないという観察に反するものである。次の例も参照のこと。(i) は最初の文で事実を呈示し次の文で証拠を述べる解釈があるが、(ii) にはそのような読みがない。
  - (i) Max fell over; he slipped on a banana skin.
  - (ii) Max fell over and he slipped on a banana skin. (Carston 1998: 145)

- 15) 前置詞が典型的には空間における2つの具象物の相対的位置関係を定めるものであることを考えれば、XとYは典型的には具象物であるが、本稿では抽象的なもの、またその延長線上にあると捉えられる事態も含まれるものとする。
- 16) Tyler and Evans は (11) を to の原図形 (proto scene) と呼んでいる。
- 17) 前置詞の操作的意味機能というのは仮定的概念で、Blakemore (1987) 以来研究されている手続き的符号化 (procedural encoding) という概念と似通い、また田中 (1997)、田中・深谷 (1998) の操作子機能という概念にも通ずるものである。本稿での操作的意味機能がこれらの概念と厳密に区別されるものであるかどうかは今後の研究を待たねばならない。
- 18) ここでは、X という単位は名詞句 (noun phrase) などの統語的構成素に対応するのではなく、文という全体命題の部分を構成する命題成分 (propositional constituent (= 意味構成素 (semantic constituent))) という単位であればよいと仮定している。したがって、(13b) で見られるように、簡略して言えば主語と動詞とがまとまったひとつの単位と見なすこととなる。
- (13) 以外の例を追加すると次のようになる。
- (i) a. China is in Asia.  
b. [<sub>X</sub> China is] [<sub>P</sub> in] [<sub>Y</sub> Asia].
- ここでは「中国が存在していること」がXという意味単位として分析され、「中国が存在していること」が「アジア」という地域の中に位置づけられると解釈される。
- 次の (iia) のような例では、階層的統語構造のうえで深いところから順に意味をまとめ上げていくと仮定してよいように思われる。
- (ii) a. I can't work with you kids under my feet.  
b. I can't work with [<sub>X</sub> you kids] [<sub>P</sub> under] [<sub>Y</sub> my feet].  
c. [<sub>X</sub> I can't work] [<sub>P</sub> with] [<sub>Y</sub> you kids under my feet].
- そうだとすると、まず (iib) で「おまえたち子供」がunderによって「自分の足元」に位置づけられ、それから (iic) で「仕事ができないこと」がwithにより「足元にいるおまえたち子供」と「一緒」にさせられ、そして文全体として「そういうおまえたちが一緒の状態では仕事にならない」という意味にまとめ上げられる。
- 19) 次のような例でも、Yが到達地点を表している。
- (i) \*Joe walked the tunnel to its end, but he did not reach its end.  
(ii) \*Bill climbed the mountain to the top, but in fact he did not reach the top (of it).
- これは、自動詞用法を持つ動詞がその直後に目的語を取ったとき、その目的語に直接的かつ全体的影響を及ぼす意味となるため、当該行為が「最後のところ」と「頂上」まで及ぶためである。
- 20) (18b) については、to の目的語がはだか名詞であることからわかるように、ランドマークはベッドという物理的存在からベッドが有する機能へと換喩的拡張 (metonymic extension) を受け、また (18c) では、物理的存在の場所ではなく抽象的状态を表し、そこが変化の結果の到達点となることを示している。また、put の概念的意味が必ずモノを移動先の場所へ接触させることであるのは、次のような例において用いられる斜字体の前置詞からも見て取れる。
- (i) \*Neal put those books *on* the table, but in fact the table had no books on it.  
(ii) \*He put all those dolls *in* the box, but in fact they never went in there.  
(iii) \*He put his lips *onto* hers, but in fact his lips never touched hers.
- 21) また、燃えている火に背中が接触したら火傷するのでそのようなことはしないだろうと推測されるからでもある。
- 22) 一般に、動詞ないしは動詞を中心とした意味が有界 (bounded) の出来事を表し、動詞に単純過去形が用いられると、行為が完遂されたことを意味する。
- (i) a. They walked { for /in } a couple of hours.  
b. They walked to the station {?\*for / in } a couple of hours. (Leech 2004: 21)  
(ii) \*He went to the kitchen, but stopped halfway.  
cf. He went *toward(s)* the kitchen, but stopped halfway. (小西 1976: 396)

また、過去形を用いないと到着を必ずしも含意しないことは次のような例によっても示される。

(i) He's going to the station, but I'm not sure whether he can get there.

(ii) He's gone to the station, but I think he hasn't reached there yet.

23) 次のような with 分詞構文の主節と従属節との意味関係が決まるに当たって推論が働いているという主張については、府川 (2004b: 323–324) を参照のこと。

(i) a. With night coming on, we closed our shop.

b. With Mexico City currently the world's largest city, I'm surprised that your company doesn't have an office there.

c. With there probably to be a meeting at 1:00, we'd better have a quick lunch.

d. With the windows not open, it must be very comfortable in that office.

24) 不定詞節を本稿のように分析すれば、不定詞節を取る主節の動詞の多くが、主節動詞の示す時から先の行為に向かう願望・思考・認識・決意などを表す動詞 (want, hope, wish, think, expect, promise, decide) であることが自然に説明されることになる。

## 参考文献

- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店。
- 奥野忠徳 (1989) 『変形文法による英語の分析』大修館書店。
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版。
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」影山太郎編『日英対照動詞の意味と構文』127–153。大修館書店。
- 草山 学 (2003) 「事象の分化と焦点化とキャンセル可能性」日本英語学会第21回大会ワークショップ口頭発表。
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』大修館書店。
- 田中茂範 (1997) 「空間表現の意味・機能」田中・松本『空間と移動の表現』1–123。研究社。
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『〈意味づけ論〉の展開—状況編成・コトバ・会話』紀伊國屋書店。
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味3』くろしお出版。
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版。
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』研究社。
- 府川謹也 (2004a) 「英語の与格構文と二重目的語構文について」『獨協大学英語研究』第59号。171–227。獨協大学。
- 府川謹也 (2004b) 「‘with’ の多義性—推論の役割」『獨協大学英語研究』第60号。305–332。獨協大学。
- 府川謹也 (2005) 「与格交替における動詞/前置詞の意味と構文の関わり合い」『言語研究の宇宙：長谷川欣佑先生古稀記念論文集』316–328。開拓社。
- 山梨正明 (1993) 「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐる』(仁田義雄編) くろしお出版。
- Abbott, V. and John B. Black (1986) “Goal-Related Inferences in Comprehension.” *Knowledge Structure*, ed. by James Galambos, Robert Abelson, and John Black, 123–142. Lawrence Erlbaum.
- Bennet, D. (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions—An Essay in Stratificational Semantics*. Longman.
- Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.
- Blakemore, D. (1988) “So as a Constraint on Relevance.” *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, ed. by Ruth Kempson, 183–195. Cambridge University Press.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances*. Blackwell.
- Blakemore, D. (2002) *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge University Press.
- Brugman, C. (1981) *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. Garland Publishing Inc.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman.

- Carston, R. (1988) "Implicature, Explicature and Truth-Theoretical Semantics." *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, ed. by Ruth Kempson, 155–181, Cambridge University Press.
- Carston, R. (1998) *Pragmatics and the Explicit-Implicit Distinction*. Doctoral dissertation, University College London.
- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Verbal Communication*. Blackwell.
- Croft, W. (2000). *Verbs: Aspect and Argument Linking*. ms.
- Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford University Press.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A Construction Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Green, G. (1974). *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press.
- Herskovits, A. (1986) *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge University Press.
- Johnson, M. (1987) *The Body in the Mind*. University of Chicago Press.
- Kempson, R. M. (1977) *Semantic Theory*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1. Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Leech, G. (1969) *Towards a Semantic Description of English*. Longman.
- Leech, G. and J. Svartvik. (1975). *A Communicative Grammar of English*. Longman.
- Leech, G. (2004). *Meaning and the English Verb*, 3rd edition. Pearson Education Limited.
- McCawley, J. D. (1983) "What's with With?" *Language* 59, 271–287.
- Taylor, J. (1990) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press.
- Mandler, J. M. (1984) *Stories, Scripts, and Scenes: Aspects of Schema Theory*. Lawrence Erlbaum.
- Miller G. and P. Johnson-Laird (1976) *Language and Perception*. Cambridge, Harvard University Press.
- Oehrle, R. T. (1976). *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Ruhl, C. (1989) *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. State University of New York Press.
- Rumelhart D. E. and A. Ortony. (1977) "The Representation of Knowledge in Memory." Anderson, J. R. ed. *Schooling and the Acquisition of Knowledge*. Lawrence Erlbaum.
- Sperber, D. and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*. MIT Press.
- Tyler, A. and V. Evans (2003). *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge University Press.

## 辞書

『CD-ROM版 ジーニアス英和大辞典』(2002) 大修館書店.

『プログレッシブ英和中辞典』(1998) 小学館.



府川謹也 (Fukawa Kin-ya)

所属：獨協大学外国語学部交流文化学科教授

専門：意味論・統語論

Email：v00v@dokkyo.ac.jp